

成人看護学実習Ⅱにおける思考過程の学習経過の報告

— 反省的思考を適用して —

広島文化学園大学看護学部

金子 潔子, 田村 和恵, 松井 英俊, 前信 由美
岩本 由美, 石川 孝則, 迫田千加子, 中井芙美子
平間かなえ, 佐々木秀美

キーワード：デューイ, 反省的思考, 看護過程

■ はじめに

昨今、看護実践能力の向上は、看護基礎教育機関における最大の重要事項である。厚労省は、平成15年「看護基礎教育における技術教育のあり方に関する検討会」¹⁾の報告で“臨地実習において看護学生が行う基本的な看護技術の水準”を提示した。看護学生が臨地実習で実施できる看護技術項目を具体的に示したのである。しかし、医療技術の進歩による技術の複雑さ、看護学生の生活体験の未熟さ、患者の権利意識の高まりなどから、臨地実習で経験できる看護技術やあらゆる健康問題をもつ患者を看護する体験が少なくなっている。臨地実習における技術体験の少ないことについては、遠藤²⁾、青木³⁾らも報告している。

看護基礎教育において、看護実践能力を向上させるには臨地実習は不可欠な学習である。学内で学んだ知識・技術を実践の場で患者のニーズに合わせて提供していくというものを経験するのである。要するに学内で学んだ理論を臨地で統合していく過程が実習であると考えられる。

A大学では、学生の看護実践能力育成の方法として、平成15年より、反省的思考を適用した成人看護学実習を展開している。それは、佐々木⁴⁾がデューイのいう反省的思考について、日常生活に生起する問題解決そのものであるという考え方を、看護教育における思考訓練に取り入れたものである。特に成人看護学実習Ⅰでは、受け持ち患

者を通して経験した看護技術の学習を中心に、学生が臨地実習で経験したことを振り返ることで、その患者に技術を提供する意味を考え、患者に合った援助方法を見直すのである。この学習方法は、実施した援助の根拠を理解すると共に技術の習得を目指している。その成果は既に報告している⁵⁾⁶⁾⁷⁾⁸⁾⁹⁾¹⁰⁾。さまざまな実習の制約の中で、より効果的な学習を考えていくには、実習におけるひとつの貴重な体験を振り返り自分のものにしていく必要がある。その学習方法として反省的思考の適用は有益であると考えている。

反省的思考についてデューイは、「物自体(things themselves)の中に含まれる真の関係に基づき被暗示事項に対する信念を誘導するという方法において現前の事実が他の事実(即ち心理)を暗示する精神活動である」¹¹⁾と定義している。これは、現象を個人の内面にどのように知覚し、必要な行為に移していくかということである。臨地実習で学生が、患者の状態から必要な援助を考え、技術を提供するという患者理解を深める過程でもある。デューイの反省的思考について、高野は「思考の精度は3段階に区分される。第一の段階は、意識にとめること、第二の段階は、漠然と浅く考える程度、第三の段階の反省的思考は持ち合わせの知識を総動員して、いろいろな角度から十分な検討を加える思考活動で、常に何らかの結論を目指している。その結論は十分な根拠を持つことになる」¹²⁾と説明している。この第三の段階の反省

的思考が看護実践能力の育成に関連していると考えられる。また看護の実践能力の向上には思考過程の学習も不可欠な要素である。思考訓練は繰り返し学習することが必要である。臨地実習において患者の情報を意図的にとらえ、その患者に起きている状況を見極め、必要な援助へと導くため、学んだ知識を総動員し、さらに新しい知識を取り入れるということを繰り返すことで、看護の思考過程を理解することができると思える。

今回は、成人看護学実習Ⅱにおいて、臨地実習終了後の学内におけるサマリーの発表とケースレポートの記述による反省的思考を適用した臨地実習を行った。そこで本論は、その学習の経過について報告し、臨地実習における振り返り学習の重要性を示した。

■ 研究方法

1. 期間：平成20年11月～平成21年2月
2. 対象：A大学3年生96名
3. 研究方法：量的研究、質的帰納的研究

- ①質問紙法：成人看護学実習Ⅱにおける学生の学びの内容の分析を参考にした39項目からなる質問紙を作成した（資料1）。質問紙は成人看護学実習Ⅱの臨地実習が終わり、振り返り学習終了後に調査した。
- ②質的帰納的研究：振り返り学習は実習最終日にサマリーの発表とその後のケースレポートを作成する。具体的な学習方法は資料2に示した。
- ③分析手順：39項目の質問紙を8カテゴリーに分け個人の平均値を算出、その後全体の平均値を求めた。またケースレポートに記述された学びの内容をカテゴリー化した。
- ④倫理的配慮：口頭と文書で調査の目的・研究以外では使用しないことなどを説明し協力を依頼した。

■ 結果

有効回答率は90.6%（87人）であった。

1) 学びの項目の平均値

39の調査項目を看護過程のプロセスと実践における態度および学びから、①病気・治療の理解、②情報収集、③アセスメント、④看護計画、⑤患者に合った援助の実施、⑥患者と関わる時の倫

理的態度、⑦振り返り、⑧カンファレンスの学びの8カテゴリーに分けた。それぞれカテゴリーの内容は表1に示した。各カテゴリーの平均値は、1. 患者と関わる時の倫理的態度（4.29）、2. カンファレンスの学び（4.26）、3. 病気・治療の理解（4.04）、4. 振り返り（4.01）、5. 情報収集（3.92）、6. アセスメント（3.8）7. 患者にあった援助の実施（3.77）、8. 看護計画（3.48）であった（表1）。この結果から、実習における態度面などの自己評価は比較的高い傾向にあり、アセスメント、看護計画・実施の項目が低い傾向にあることがわかった（図1）。

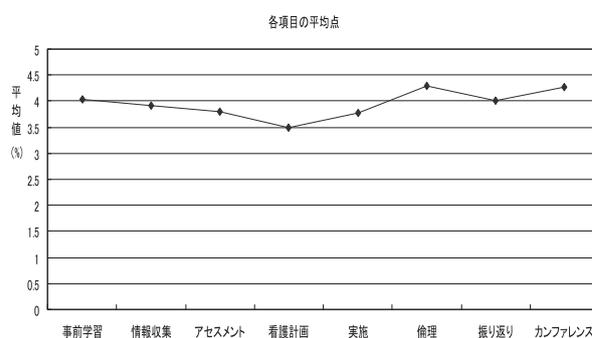


図1 各項目の平均値の推移

2) 学びの記述内容

ケースレポートの学びの内容を検討した結果、65の文脈が抽出できた。次に類似の文脈を整理し23の中カテゴリーを抽出した。さらに類似のものを検討した結果、10の大カテゴリーを抽出することができた。この大カテゴリーは、援助をするには根拠が大切であることから「援助するには根拠が大切」、看護の可能性を考えることから、「看護の可能性を考える」、治療時も倫理的態度が必要であるなどから「倫理的態度が必要である」、知識・技術の大切さを目の当たりに学んだ、看護師が看護モデルを示したことなどから「実践での看護モデルをみて学ぶ」、寄り添って話を聞く、患者から逃げない、患者と向き合うなどから「患者と向き合うことが大切」、看護実践にはコミュニケーション技術の必要性を痛感、コミュニケーションの工夫による看護の実践などから「看護実践にはコミュニケーション技術が必要」、援助を振り返り評価することでよい看護ができるなどから「援助を振り返り評価することはよい看護ができる」、患者の意向に沿う、心身の理解などから「患者の状態にあった看護」、患者にとって家族は大切な存在、家族も援助の対象であるなどから「患

資料1 成人看護学実習Ⅲまとめアンケート

項目	大変 そう思う	そう 思う	普通	あまり 思わない	全く 思わない
1 患者の病態について理解できた	5	4	3	2	1
2 疾患の主な症状について理解できた	5	4	3	2	1
3 患者の行われている治療について理解できた	5	4	3	2	1
4 患者に必要な検査について理解できた	5	4	3	2	1
5 患者の症状・状態について意図的に観察できた	5	4	3	2	1
6 患者に行われている治療・処置について情報収集できた	5	4	3	2	1
7 患者から主観的情報を得ることができた	5	4	3	2	1
8 カルテ・その他から情報収集できた	5	4	3	2	1
9 情報収集は事前学習を踏まえ意図的に行った	5	4	3	2	1
10 情報を病態など基礎知識と関連づけて解釈・分析できた	5	4	3	2	1
11 患者の発達段階や健康レベルを踏まえて、情報の分析・解釈ができたことができた	5	4	3	2	1
12 関連図を描くことで患者の全体像が把握できた	5	4	3	2	1
13 看護問題を明確にできた	5	4	3	2	1
14 患者に必要な看護が理解できた	5	4	3	2	1
15 看護問題解決のための目標設定ができた	5	4	3	2	1
16 患者の状態にあった援助を計画できた	5	4	3	2	1
17 計画は科学的根拠に基づいていた	5	4	3	2	1
18 計画は看護の原則を踏まえ具体的(5W1H)であった	5	4	3	2	1
19 援助は計画に基づいて実施した	5	4	3	2	1
20 患者の思いをきくことができた	5	4	3	2	1
21 安全・安楽の原則を踏まえて援助を実施できた	5	4	3	2	1
22 援助は時間(経済性)・効率性を考えて実施した	5	4	3	2	1
23 援助時、創意工夫ができた	5	4	3	2	1
24 患者の思い・気持ちが理解できた	5	4	3	2	1
25 自分の実施した援助は患者に有効であった	5	4	3	2	1
26 自分の実施した援助を振り返ることができた	5	4	3	2	1
27 患者とのコミュニケーションを円滑に図ることができた	5	4	3	2	1
28 患者の反応も踏まえて評価できた	5	4	3	2	1
29 学習には複数のテキスト・文献を用いた	5	4	3	2	1
30 学生間で疾患・看護など学習の共有ができた	5	4	3	2	1
31 何を学習すればよいか分かった	5	4	3	2	1
32 患者とのかかわりでは相手を尊重する態度を心がけた	5	4	3	2	1
33 患者のプライバシーの保護に配慮した	5	4	3	2	1
34 助言を十分いかすことができた	5	4	3	2	1
35 人の意見を聞くことは学びになった	5	4	3	2	1
36 援助技術は自信持って実施できた	5	4	3	2	1
37 グループ内で協力ができた	5	4	3	2	1
38 カンファレンスでは、すすんで発言できた	5	4	3	2	1
39 カンファレンスは実習の振り返りに役立った	5	4	3	2	1

資料2 振り返り学習の方法

1. 実習グループは、5人または6人から構成される20グループに分かれている。それを4期に分け、1人の教員が1グループを担当し、実習指導を各施設の臨床指導者らと一緒にやっている。
2. 原則として、土・日曜日を除き、病院での臨地実習を11日間、学内での実習（オリエンテーションと反省会を含む）4日間のうち、1日は発表を含む反省的思考を行う時間に当てる。
3. 振り返りのグループメンバー構成は、実習グループのメンバーを全て、入れ替えたメンバーで構成し行う。グループ人数は、4人から5人のグループとし、発表グループを担当する教員も、実習を担当したグループを担当するよう割り当てた。
4. 臨地実習を進める中で、看護過程を展開し、重要であると考えた看護問題を1つ取り上げ、看護サマリーに沿ったレジュメを作成する。
5. 発表は、1人20分から30分で、発表後に学生や教員とで質疑応答を行う。質疑応答の主な内容は、病態など知識に関すること、看護実践の振り返りである。
6. 各グループの振り返り終了後、教員によって発表内容に関する評価が行われる。
7. 発表後学生を対象にアンケート調査を行う。
8. 成人看護学実習Ⅱ終了後に、看護過程の記録のほか、受け持った事例のケースレポートの提出を行っている。振り返り学習によって、実習中には気付かなかったことや、深まったことを反映させながらケースレポートを作成させる。

表1 項目毎の平均値

アンケート項目	カテゴリー	平均値
患者の病態について理解できた	病気・治療の理解	4.04
疾患の主な症状について理解できた		
患者の行われている治療について理解できた		
患者に必要な検査について理解できた		
学習には複数のテキスト・文献を用いた		
何を学習すればよいか分かった		
患者の症状・状態について意図的に観察できた	情報収集	3.92
患者に行われている治療・処置について情報収集できた		
患者から主観的情報を得ることができた		
カルテ・その他から情報収集できた		
情報収集は事前学習を踏まえ意図的に行った	アセスメント	3.8
情報を病態など基礎知識と関連づけて解釈・分析できた		
患者の発達段階や健康レベルを踏まえて、情報の分析・解釈ができたことができた		
関連図を描くことで患者の全体像が把握できた		
看護問題を明確にできた		
患者に必要な看護が理解できた		
看護問題解決のための目標設定ができた	看護計画	3.48
患者の状態にあった援助を計画できた		
計画は科学的根拠に基づいていた		
計画は看護の原則を踏まえ具体的(5W1H)であった		
援助は計画に基づいて実施した	患者に合った援助の実施	3.77
患者の思いをきくことができた		
安全・安楽の原則を踏まえて援助を実施できた		
援助は時間(経済性)・効率性を考えて実施した		
援助時、創意工夫ができた		
患者の思い・気持ちが理解できた		
援助技術は自信持って実施できた	患者と関わる時の倫理的態度	4.29
患者とのコミュニケーションを円滑に図ることができた		
患者とのかわりでは相手を尊重する態度を心がけた		
患者のプライバシーの保護に配慮した	振り返り	4.01
自分の実施した援助は患者に有効であった		
自分の実施した援助を振り返ることができた		
患者の反応も踏まえて評価できた	カンファレンスでの学び	4.26
学生間で疾患・看護など学習の共有ができた		
助言を十分いかすことができた		
人の意見を聞くことは学びになった		
グループ内で協力できた		
カンファレンスでは、すすんで発言できた		
カンファレンスは実習の振り返りに役立った		

者にとって大切な家族も援助の対象」, 観察の意味を知る, 反応を読み取るなどから「観察は看護に重要」であった(図2)。

学生がケースレポートを作成した後の学びの内

容では, 知識に関する項目が一つ, 倫理的態度に関する項目が一つ, 看護実践に関する項目が八つであった。

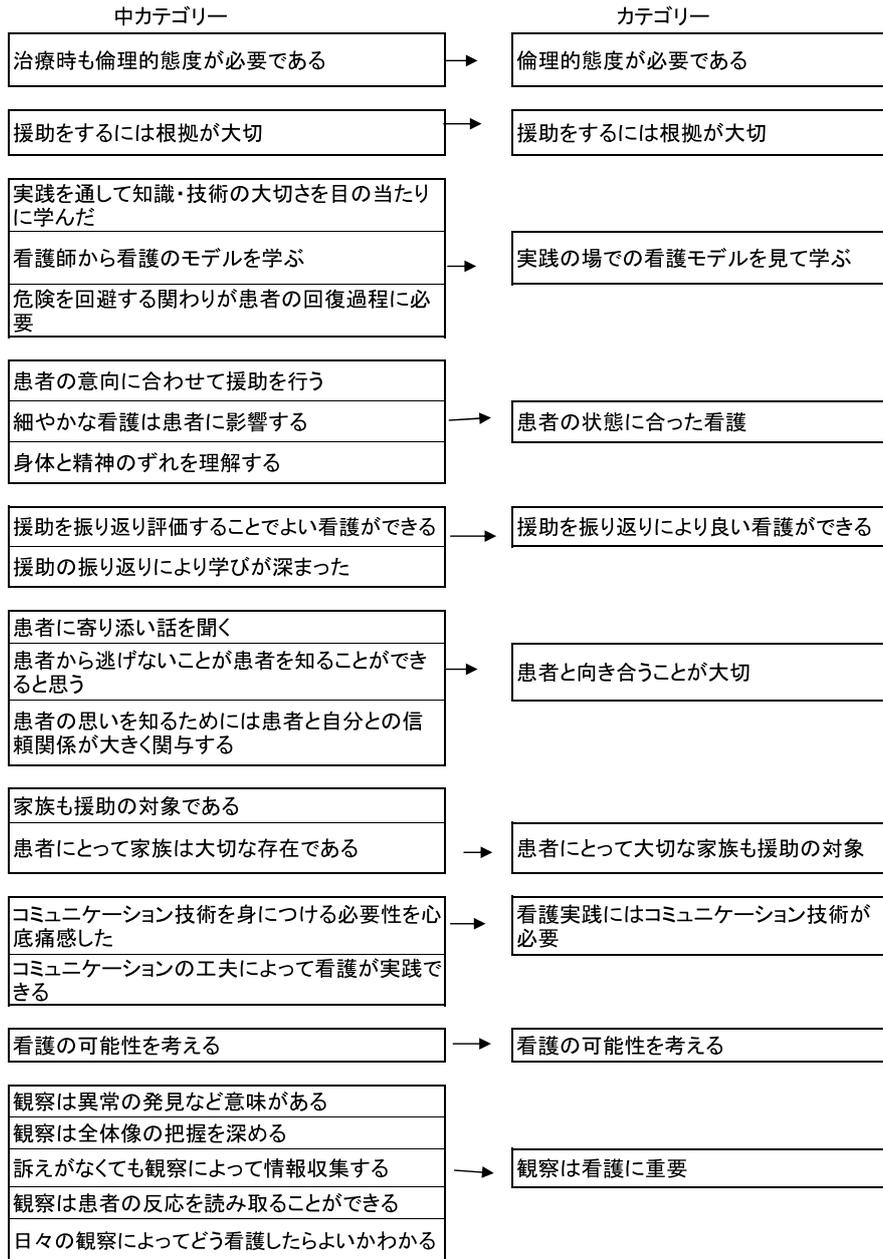


図2 学生の学びの記述

■ 考 察

成人看護学実習Ⅱにおける振り返り学習後の、学生の実習に関する自己評価の結果、患者とかかわるときの態度やカンファレンスによる学びの平均値が高い傾向にあった。また学生は病気・治療などの事前学習は、ある程度行っていると評価している一方で、アセスメント・計画・実施は低い傾向にあった。このことは、学習したことと臨地で患者に出会った際に、学習した知識を活用できていないためではないかと考える。臨地実習は、学内の講義や演習で学んだ知識を統合して患者に

必要な看護を見出していかなければならない。これは臨地実習における重要な学習目標である。実際、学生は病気や治療・検査について自己学習は行っている。しかしその知識を活用しきれていないためアセスメントが不十分となっている。そのことについて、学生は調べることはできるが、その意味を理解するところまでいたっていないことが考えられる。患者のアセスメントが不十分であるということは、患者に必要な看護が見出せないことになり、その結果看護計画も個別性に欠け、一般的になっていたことが、計画ができていないという評価になっていると考えられる。学生の実

施する技術は、観察や日常生活の援助や中心になっているが、生活体験が浅いため、日常生活援助における身体を拭く・洗う、ベッドの周囲を片付けるといった行為がぎこちなく、結果として技術を実施ができないと認識しているのだと考える。南らも「看護過程の思考過程と実施の平均値が低く、特にアセスメントから看護診断までの思考過程に困難を生じていた」¹³⁾と報告している。

鶴見は、デューイの教育思想のなかで、「関心ということ、教育において重大なことと考えた」¹⁴⁾と述べている。学生が関心を持ったり、自分の関心から行動を行ったりしていくということが重要なのであり、これは看護基礎教育における臨地実習でも同様ではないかと考える。患者に関心を持つことで、この人はどういう病気なのだろうか、どんな苦痛があるのだろうか、どうすれば健康を回復し、苦痛を緩和ができるのだろうかと次から次へと関心が広がり、自然に知識と患者の状態が統合され、患者理解は深化されていくのである。実習において知的好奇心をもって行動するということである。わからないことについて「調べる」・「探求する」ということは反省的思考に他ならない。学生は、課題を調べることはするが、さらに探求し理解につなげることが苦手なのであろう。それは、学内での講義は受身であるが、臨地実習は自ら考え行動していかなければならないという能動的な学習である。ところが、最近の学生は、インターネットなど手軽な方法での学習方法によるため、調べながら理解していくというプロセスを踏んでいないのではないかと考える。

態度面について、学生の自己評価が高い傾向にあったことは、入学時より挨拶・学習姿勢について教職員一丸となって教育に当たっている。また実習施設を持たないため、すべての実習が外部に出て行くということから、実習前のオリエンテーションは実習のねらいや方法はもとより、実習における態度については、マナー研修なども含めて綿密にオリエンテーションを実施している。これらの指導も影響していると考えられる。

学生の自己評価において、実施の項目が低かったが、学びの記述では実践の項目が多かったことについて、学生は患者に援助を行うことと実習を

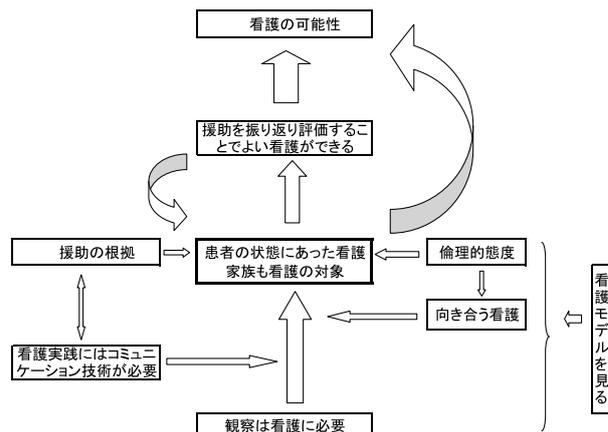


図3 学びの内容の関係

通しての学びの内容とは必ずしも一致していないことがわかった。臨地実習で患者とかかわること以外においても、援助場面を見学したり、指導者の話を聞いたり・カンファレンスに参加したりする経験の一つ一つが学生の学びにつながるのだといえる。

学生の学びの記述から得られた結果の関連を図3に示した。これは、学生が観察によって患者を把握し、コミュニケーション技術や患者と向き合うことで患者の状態にあった看護ができること、家族も援助の対象であることをとらえている。また、患者の状態にあった援助を行うには、援助の根拠や倫理的態度の必要性にも気づいている。さらに看護モデルを見て学ぶことも、患者の状態にあった看護につながると考える。学生は、患者との関わりを振り返る中で看護の可能性を考え、臨地でしか学べない看護に気づくことができる。振り返り学習は、臨地における経験を意味づけ、学生が自己の学習姿勢を見直す学習でもあると考える。

■ おわりに

成人看護学実習Ⅰに続いて、成人看護学実習Ⅱにおいても、反省的思考を活用した学習方法を実施した。臨地における学習だけでなく、学内に戻って看護過程を振り返ることで患者理解や看護の方法についての理解を深める学習方法は、改めて効果があると考えている。

引用文献

- 1) www.mhlw.go.jp/shingi/2007/04/dl/s0420-13.pdf：看護基礎教育における技術教育のあり方に関する検討会報告書，2007
- 2) 遠藤みどり他：看護実践応力向上のための取り組み－臨地実習での技術項目リスト・チェック表の活用－山梨県立大学看護学部紀要 Vol.9, 43-53, 2007
- 3) 青木みつ子他：基礎看護学実習における看護技術の経験状況，愛媛県立医療技術大学紀要 Vol.3 (1), 37-44, 2006
- 4) 佐々木秀美：看護教育における思考訓練の重要性－デューイの反省的思考論を手がかりに，明星大学教育学研究紀要第18号, 39-47, 2003
- 5) 松原みゆき，佐々木秀美他：デューイの反省的思考（reflective thinking）の適用－成人看護学実習Ⅰの取り組みに関する報告その1－，看護学統合研究5 (2), 18-23
- 6) 松原みゆき他：デューイの反省的思考の適応－成人看護学臨地実習Ⅰの取り組みに減する報告 その2－，看護学統合研究, 6巻1号, 30-34, 2004
- 7) 松原みゆき他：デューイの反省的思考の適応－成人看護学臨地実習Ⅰへの2年間の取り組みの報告，日本医学看護学教育学会誌, 28, 2005
- 8) 松原みゆき他：思考訓練法を応用した成人看護学実習の取り組み 日本医学看護学教育学会誌 No.15, 40-46, 2005
- 9) 金子潔子他：反省的思考を適用した継続教育－成人看護学実習Ⅱにおける取り組みから－第17回日本医学看護学教育学会学術学会抄録集, 33, 2007
- 10) 金子潔子他：反省的思考を適応した技術教育－成人看護学実習Ⅰに動画を取り入れて－，第19回日本医学看護学教育学会学術学会抄録集, 35, 2009
- 11) ジョン・デューイ著，植田清次訳：思考の方法（How We Think），春秋社, 16-17, 1950
- 12) 高野兼吉：思考訓練の教育学的意義－デューイの反省的思考の概念を中心として－教育哲学研究, 13巻, 51-70, 1966
- 13) 南修子，園田麻利子，七川正一他：成人看護学実習Ⅱ置ける学生の自己教育力に影響する要因の検討，鹿児島純心女子大学看護栄養学部紀要, Volt.10, 26-37, 2006
- 14) 鶴見俊輔：鶴見俊輔集2 先行者たち，筑摩書房, 144, 1991